

母子栄養指導のシステム化に関する研究 分担研究報告書

分担研究者 高橋悦二郎

研究の目的

小児の健康レベルの向上、健全育成の重要性が改めて問われるようになってきているが、その中で生涯にわたる健康の基本として、乳幼児期からの適正な食生活の意義が取り上げられるようになった。小児期からの成人病予防につながる食生活指導、家庭機能としての食生活の重要性を解析、今後の栄養指導の方向を策定する必要がある。その他、顎の発達と口腔疾患予防につながる食生活、アレルギー疾患と食生活についても未解明の部分、一般家庭での知識不足による誤った思い込みもしくは見受けられるので、これらについても現在の医学知見を収集して方針を策定する。

研究の方法

以下の4テーマについて研究グループを組織し、調査・研究を実施した。

- 1) 母子に対する栄養指導の指針策定に関する研究 (研究グループリーダー: 水野 清子)
- 2) 離乳食、幼児食に関する研究 (同上: 高橋悦二郎)
- 3) アレルギー性疾患児に対する食生活指導の研究 (同上: 高嶋 宏哉)
- 4) 歯科疾患予防に関わる食習慣に関する研究 (同上: 赤坂 守人)

研究の結果

1) 母子に対する栄養指導の指針策定に関する研究

指針策定に先立ち、各保健所・市町村レベルでの母子栄養指導の実態を知るため、5か月～14か月児4634名を対象に栄養・食生活調査を行い、離乳食の進め方、その途上での問題点、親の情報源等につきとまとめた。その結果をふまえて指導指針を作成する。

2) 離乳食、幼児食に関する研究

幼児の摂食行動についての調査からは、栄養学的にも母子一緒に食事の必要性が示された。母子別々の場合、食物の種類が少なく、食事時間も短い。また、保育所の給食を調査したところ、エネルギー量(呼気分析実施)としては従来の基準に合っていたが、さらに生活行動の実態に照らして食物量との関連を検討する。

3) アレルギー性疾患児に対する食事指導の研究

食物アレルギーに関連して特定の食品の除去食の指導を経験した保健婦は4分の3、保母は半数に及んだが、そのための知識は研修会によっていた。皮膚の症状を即食物アレルギーととらえ、RAST法陽性食品をアレルゲンと断定してしまう診断の傾向はいたずらに親に不安感を与え、成長期にある乳幼児の栄養指導上問題が大きい。食品除去は医療行為であり、保健所でマスに取り扱ったり、保育所等で親の希望だけで扱うのは好ましくない。本年度から来年度にかけての調査成績をもとに、保育所保母に理解を得られるようなマニュアルを作成する予定。なお、母親のアレルギー歴や妊娠中の食事制限と臍帯血IgE値との間には相関なく、MAST法による特異IgE抗体も陽性例を見出さなかった。

4) 歯科疾患予防に関わる食習慣に関する研究

最近、噛まない子、噛めない子の増加が心配される。そしゃく能力値(チューインガム法)は第一乳臼歯欠損の影響が大きい。またそしゃく能力と食習慣とに食物物性的関連が認められる。歯科保健面からも食生活指導は重要である。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



研究の目的

小児の健康レベルの向上、健全育成の重要性が改めて問われるようになってきているが、その中で生涯にわたる健康の基本として、乳幼児期からの適正な食生活の意義が取り上げられるようになった。小児期からの成人病予防につながる食生活指導、家庭機能としての食生活の重要性を解析、今後の栄養指導の方向を策定する必要がある。その他、顎の発達と口腔疾患予防につながる食生活、アレルギー疾患と食生活についても未解明の部分、一般家庭での知識不足による誤った思い込みもしばしば見受けられるので、これらについても現在の医学知見を収集して方針を策定する。